

# ポーランド断章

先川 信一郎

私が記者時代に初めてポーランドを訪れたのは、1983年12月でした。自  
 主管理労組「連帯」のレフ・ワレサ委員長のノーベル平和賞受賞が決まり、民主  
 化のうねりの中で「連帯」が政治の表舞台に出てきたころです。厳冬の中、東欧  
 全体が社会主義体制の崩壊を予感する人々の熱気と緊張感に包まれていました。



当時、ヤルゼルスキ政権が恐れていたのは「連帯」  
 を率いる“鉄の男”、ワレサ委員長です。グダンスクの  
 レーニン造船所の電気工だった彼は、政府の弾圧に  
 屈しない「最も危険な人物」として何度も拘束され、当  
 局の厳しい監視下に置かれていました。

言論の自由は制限され、慢性的な経済危機の中  
 で、公共放送から聞こえてくるのは、政府のプロパガ  
 ンダばかりです。それでも彼が発する「一人の人間に  
 も事態を変える力がある」といった率直な言葉は、ロ  
 コミや非合法文書で全国に伝わり、人々に勇気と希  
 望を与えていました。

もしこのタイミングで世界が見守るワレサ氏に会え  
 れば、大ニュースになるのでは——私は大胆にもこう  
 考え、慎重に情勢を探りました。現地に詳しい関係者  
 からは「取材はどうも無理」「捕まって強制退去にな  
 るのがオチ」といった悲観的な答えばかりが返ってき  
 ます。ですが、せつかくポーランドにいるのです。あき  
 らめるわけにはいきません。街を歩く人々の話を聞き  
 ながら、時代が動いていることを肌で感じていました。

## 突撃取材を決行

記者は、時として歴史の転換点に遭遇することがあ  
 ります。ロシア十月革命を経験し「世界を揺るがした1  
 0日間」を著したジョン・リードしかり。毛沢東と会見し  
 「中国の赤い星」を書いたエドガー・スノーしかりです。

こうなったらアポなしの突撃取材しかない。逮捕さ  
 れても数日の拘束だけだろうと腹をくくり、通訳の青年  
 と列車でグダンスクに向かいました。目立たぬよう薄汚  
 れた労働者風の服を着ていましたが、今思えば気分  
 はミッション・インポッシブルのトム・クルーズです。

グダンスクでは、委員長が住む4階建ての質素な  
 アパートを突き止め、周囲の下見をしました。望遠レ  
 ンズで覗くと、出入口にパトカーが2台。目指す2階  
 への階段は一つ。見張りの警察官が交代する時間は  
 午後4時…。事前に「連帯」のメンバーから聞いてい  
 た通りです。「これまで、アパートの前で何人もの外国  
 人記者が拘束された。気を付けるように」と言われて  
 いました。

チャンスは午後4時です。翌日夕、警察官が交代  
 した際にダッシュでアパートの2階に駆け上がりまし  
 た。ドアを「ドンドン」と叩くと、ボディガードらしき青年が

ドアを少し開け「委員長はクリスマス休暇中だ。だれ  
 にも会わない」と言い放ち閉めようとしています。私も必死  
 です。ドアを手で押さえ「日本から来たんだ。5分でも  
 いいから会いたい」と食い下がると「少し待って」とい  
 ったん引っ込んでから、部屋に通してくれました。

ちょっとした事前の行動が功を奏していたようです。  
 前日、外で絨毯のほこりを払っていたダスタ夫人に  
 「ノーベル平和賞受賞おめでとうございます! 北海道  
 新聞の記者です」と挨拶し両手いっぱいのガーベラ  
 の花束を贈っていました。そのことに気が付いたよう  
 です。

## 政府交渉に意欲

昼寝から覚めたばかりのワレサ氏は、えんじ色のセ  
 ーターを着ていました。応接間の壁には、ポーランド  
 出身のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の写真が飾って  
 あります。がっちと握手してくれ「わざわざ日本から来  
 てくれたのか。さあ、なんでも聞いてくれ」と通訳を介  
 し上機嫌で質問に答えてくれました。

日本の協力を謝意を述べた後「今の段階は、以前  
 とはちょっと違う段階に入っている。(連帯は)政府に  
 は承認されていないし、公式な活動をする権利も持  
 っていない。でも、この問題は、解決できる種類のも  
 のだ」、さらに「遅かれ早かれ(政府との)話し合いのテ  
 ーブルにつくことになるだろう。必ず話し合いは実現  
 できるし、21世紀になればすべての問題が話し合い  
 で解決できると信じている」と語り、政府との交渉に前  
 向きだったのが印象的でした。

部屋は盗聴されているので、この会話は秘密警察  
 に筒抜けだったはずですが、長居は無用。早々に取材  
 を切り上げ、タクシーに飛び乗りました。いつ拘束さ  
 れるか。尾行はいないか。ドキドキしながら無事に逃  
 げ切りました。

最近わかったことですが、翌84年に1人の日本人  
 学生が同じくワレサ委員長のアパートを訪ねました。  
 しかし、彼は出口で逮捕され、一晚留置場で過ごし  
 たそうです。罪状はパスポート不携帯。その学生とは、  
 ワルシャワ中央計画統計大学に交換留学していた若  
 き日の河野太郎氏(衆議院議員)でした。

## ピウスツキ兄弟

グダンスクを後にした私は、次にクラクフやポズナン、ザコパネを訪ねました。各地の科学アカデミーの民族学者やアダム・ミツケビッチ大学(AMU)の研究者を取材し、帰国後に「ロウ管の歌」(道新選書、1987)という本にまとめました。

これは、ロシア皇帝暗殺事件に連座して樺太に流刑となったポーランドの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866~1918)の数奇な生涯を追った物語です。彼が樺太流刑時代に録音した樺太アイヌ語のロウ管レコードは、言語学的に大変貴重なものでした。それをポーランドと北大を中心とした研究者が連携し“幻の音声”の復元に成功したのです。

ちなみに、ブロニスワフの弟が、ポーランド独立運動を指導した救国の英雄ユーゼフ・ピウスツキ(1867~1935)です。ユーゼフは第一次大戦の混乱を経て1918年に初代国家元首となります。1920年のソヴィエト・ポーランド戦争で、ソヴィエト・ロシア支配下にあったウクライナのキーウまで進撃しましたが、戦線が伸びすぎて赤軍に敗退。逆にワルシャワ近郊まで攻め込まれます。ここでユーゼフ自らが先頭に立ち、背後から赤軍を包囲して撃退します。“ヴィスワ川の奇跡”といわれる大逆転勝利でした。これによりポーランドは分割前の国土を回復します。

さて、現在に話を戻すと、ポーランドの隣国ウクライナでは、侵攻したロシア軍との間で激しい消耗戦が続いています。SNSからは、虐殺やレイプ、焦土作戦の悲惨な状況が伝わってきます。この戦争は民間人をも標的にし、民族のアイデンティティーばかりか、歴

史と文化の破壊を狙っています。つまり、「停戦」したとしても、ロシア軍がウクライナ領内に留まっている限り残虐行為が続き、平和はあり得ないのです。

ウクライナのゼレンスキー大統領は「もっと武器の供与を」と西側諸国に訴え、徹底抗戦の構えをみせています。時代こそ違え、私にはゼレンスキー大統領とユーゼフ・ピウスツキの姿が重なって見えます。

### 民衆蜂起を訴え

ところでウクライナ情勢に関連し、ワレサ氏は7月8日、フランス・テレビとのインタビューで「ウクライナが戦争に勝ったとしても、5年後には同じことが起こり、10年後には別のプーチンが出てくる。そうならないためには、モスクワの政治体制を変えるか、ロシア連邦をバラバラに解体し人口を5000万人以下に減らすしかない。プーチン政権を倒すには各共和国の民衆が蜂起するよう組織化することが必要だ」と述べ、連邦を構成する共和国に蜂起を呼びかけました。この発言にロシア政府関係者は激怒し、報復としてワレサ氏の首に500万ドルの賞金をかける提案を行ったそうです。彼はこれを面白がり、Facebook にボディガードを連れて平然と教会に通う様子をアップしています。

ワレサ氏にかつてのような政治的影響力はないと思っていたのですが、ポーランド元大統領の発言とあって、ロシア側も無視できなかったようです。「私が恐れるのは神のみ。そして、ほんの少し恐れるのは妻」と語るなど、78歳の今でも“鉄の男”は健在です。(さきかわ・しんいちろう、高知工科大学客員教授、会員)

## 《エッセイ》

## 葛は葛でも

嵩 文彦

葛はマメ科クズ属、ツル性の繁殖力旺盛な多年草で、北海道にも生育すると文献には出ていますが、目にした記憶がありません。根は葛粉になり、風邪薬としてポピュラーな葛根湯の原料にもなっています。一八七六年(明治九年)アメリカのフィラデルフィアで独立百年祭博覧会が開かれたとき、飼料用作物、園芸装飾用植物として日本から持ち込まれ、荒地の緑化や堤防の土壌流出防止に用いられているうちに広がりすぎて、侵略的外来植物としていまだに排除されつつけているそうです。北海道はいくら温暖化が進んでいるとはいえ葛には繁殖条件がよくないでしょう。

葛は大和国の吉野川の上流の国栖(クズ)の人が売り歩いたので吉野の葛として有名になったと文献にあります。吉野川にはクズと呼ばれる所は二か所あり、上流のクズには「国栖」、下流のクズには「葛」が当てられています。「国栖」のほうは皇位継承を巡る争いがテーマになった能のタイトルになり、見事に京の

文化に取り込まれました。

かつては吉野・熊野一帯「まつろわぬ民」の住む土地でした。土蜘蛛(土雲)、国栖八握脛(八束脛)(くずやつかはぎ)というような蔑称で文献に出てきます。恐らく吉野の異属のほうが熊野よりも早く朝廷に恭順したのでしょう。また吉野は勅撰集いらい歌枕になって人口に膾炙しました。熊野の反抗精神は衰えませんでした。南北朝の争乱のときも熊野の民衆は南朝に味方したものが多かったのです。歴史の通り南朝は北朝に敗れますが、南朝の高貴な身分の人物が、山里深く隠れ住むというロマンを生みました。

そもそもクズは「屑」に通じる音です。また熊野にはガケ、コケと呼ばれる地名もあり、歴史の根はかなり深いのです。

「吉野葛」と聞くと「吉野でとれた葛粉」を思うのが普通です。実はこれ、谷崎潤一郎の小説のタイトルです。

「私」は南北朝の争乱を南朝の側から描いたロマン

にしようと、母親が国栖出身の友人の伝手で情報を得て、現地を見なくてももう小説はかけるほど資料が揃っているのですが、その友人の母方の家系のさらなる調査に国栖を訪れるのに同行します。実は友人の母方の家は没落し、少女は遊郭に売られますが、ほどなく友人の父になる青年に見初められて結婚し、友人が誕生することになります。ここには母の出自に負い目を抱く青年は出てきません。差別意識を纏った人物は一人も現れません。

この小説の最後は「私」の友人が母方の伯母の孫が

紙漉きの冷たい水で手指を真っ赤にして働いているのを見て、好意を抱きます。「(略) 吊り橋の上から、／「おーい」／と呼んだ者があった。見ると、津村が、多分お和佐さんであろう、娘を一人うしろに連れてこちらへ渡って来るのである。二人の重みで吊り橋が微かに揺れ、下駄の音がコーン、コーンと、谷に響いた。」

谷崎はなぜ重い歴史の積み重なる吉野を舞台に、それには一切触れることなく、このような小説を書こうとしたのでしょうか。差別という業と無縁のさわやかな青年を登場させて。(だけ・ふみひこ、会員)

《私信》

## 身体楽器論～若い友人の新著に寄せて

井上 紘一

金子遊 様

我が家近くの愛育病院に2泊3日で入院しました。早朝の定期検査を済ませて帰宅後、遅い朝食中に突如として下腹部を激痛が走り、七転八倒の苦痛に堪え切れず病院へ舞い戻りました。またもや一巻の終わりか、と観念した次第です。

CTスキャン、エコー、レントゲン検査の末、「S結腸軸捻転腸閉塞」と診断されました。いわゆる腸捻転由来の「糞づまり」という奴だったようです。応急措置として大腸内視鏡による検査と、捻転した結腸の原状回復が試行された結果、幸運にも施術は奏功、7時間に及んだ激痛との闘争には終止符が打たれた次第です。即入院でした。

\* \* \*

一件がゴールデンウィーク前日に出来たのも不幸中の幸いでしたが、この3日間を御高著『マクロネシア紀行』とともに過ごせたのはまことに僥倖でした。(金子遊著『マクロネシア紀行～「縄文」世界をめぐる旅』東京:アーツアンドクラフツ刊、2022.4)



発見①あなたの御母堂が全共闘世代のフェミニストであられたこと。当時の小生は大学院在籍中でしたから、母上よりやや年長のようなのですが、いずれにせよ小生とあなたの間には親子ほどの年齢差がある事実を改めて痛感した次第です。

発見②あなたが作品中でさりげなく吐露された信条。「…現場までいき、自分の足で歩き、眼で見て、耳で聴いて、においを嗅いで、他人の声やメディアを媒介することなく、自分の身体を反響する楽器のようにして感じとらなくてはならない」(p.114)

\* \* \*

小生は端なくも、1990年代によく実現したシベリアでのフィールドワークを想起しました。「トナカイ飼育

民の生き残り戦略」を掲げた小生は、ヤクーチヤのエウエン、イルクーツク州北方のエウエンキ、北サハリンのウイлта、ウラル山脈東麓のコミを歴訪しました。しかしソ連崩壊後の混沌たる政治・経済・社会情勢下で見出したのは、各自が己の生存を賭して闘う修羅場です。

フィールドワーカーとしては些か臺の立った初老の小生を、現地の人々は温かく迎え入れ、対話にも誠実に応じ、生き様をさらけてくれました。だが如何せん、彼らは掛け値なしの生存闘争中でして、一切の生き残り戦略も展望できず、軒並みに滅びの諦念を吐露するばかり。確かに、当面の生存を辛うじて支えていたのはトナカイ飼育にほかなりませんが、御先祖様に倣って、これを元手に再出発を図る意欲は、まことに遺憾ながら見出せなかった。70年にわたる国家の「おんぶに抱っこ」体制下の就業に馴染みすぎたせいで、経済が破綻し国庫補助金がなくなると、路頭に迷う以外になかったわけです。(ソ連期の彼らは御先祖様のような自立した事業主ではなく、国営企業に勤める被傭者にすぎなかった)

小生の身体楽器は彼らの絶望・苦悩・諦念を切実に把握したもの、たまさか居合わせた遠来の研究者にできることは極めて僅かで、ひたすら対話者に寄り添いその語りに耳を傾けるほかありませんでした。

北大スラブ研究センター長のお鉢が回ってきた1998年、フィールドワークに割く余裕がなくなって、シベリア調査を打ち切りました。とりわけ注力したエウエンキとウイлтаの事例は、既に存亡の危機に瀕していましたから、「生き残り戦略」の模索も見果てぬ夢と化した次第です。こうして小生のシベリア・フィールドワークは、所期の目的を達成することなく挫折を余儀なくされました。

\* \* \*

目下進行中のウクライナ戦争は、外国人によるシベリア現地調査を30年ぶりに中断させることになるでしょう。この中断もやはり長丁場になりそうです。

(いのうえ・こういち、札幌、2022/5/2)